

KOOSAIHO

－ 虹の色彩論 －

瀬崎正人 作
風の境界文庫

(もくじ)

〈 出逢い 〉	 3
〈 KOOSAIHO 〉	 5
〈 自然界の色彩 〉	 13
〈 虹の贈り物 〉	 38

へ出逢いへ

1996年十月二八日、北海道スケッチ旅行をしていた霧多布岬でのこと。

その日は未明から、海に映った月明かりに見とれながら、ながいあいだ夜の海の景色をたのしんでいた。

それは、天の高いところにあった月が、西の地平線へと沈み、東の水平線あたりが仄かに白みはじめたそのころであったと記憶している。

海も陸も三六〇度が真っ平らにみわたせるその場所で、境界線にそって天球をつつみこむ虹を見た。

……虹は、空の一番高いところまでを淡い紫色に染めあげて、気がつくと、自分も風景もすべてが虹につつまれていた。

『あー、これが自然をあらわす色なんだ!!』
そのときわたしは、虹につつまれるこの星を見ていた。

〈KOOSAIHO〉

絵を描くといえ、通常、デッサンからはじめてその後、色を塗る、と考えるのがしぜんであり、色から描いて形をあらわす。と言え、なにか奇異に感じられるかもしれない。

“虹彩法（KOOSAIHO）”と名づけたこの描法は、通常おこわれる描法とは違った観点に立ち、まず色を描くことから始めてゆきます。

なぜ色から描くのか？ と問われたら、それは、自然界の色彩には線というものが存在しないから。と、答えることができます。

なぜなら――、観察する意識を、物の形から色彩へと移行したとたん、線と見えていたそこに、さまざまな色が現れ出す。ことになるからです。

線とは、物を捉えようとする人間の意識が作りだす概念であり、デッサンとは、「わたしは、物を、このように捉えている」と、表明することにほかなりません。

それとは逆に、色彩のほうはといえば、捉えようとする意識を解けば、自由になる。

……つまり『線』は、人間において、自由であり、

『色』は、自然界において自由である。とすることができます。

そこでこの描法は、その色彩のほうに意識の目を向けることで、今までおこなわれてきた絵画の方法に、新たな観点を提示できるのではないかと考えます。

*

雨上がりの大空に架かる虹は、なぜ人の気持ちを捉えて、美しいのでしょうか。

それは、『人の内面を表す色だから』と考えることは、夢物語の絵空事なのではないか。

自然界には、この鮮やかに輝く虹の色が、お互いを損なうことなく、浸透し合い、

満ちている様子を観察することができます。

ここで言う“虹の色”とは、太陽の元にある（モノを物として見せている大本の）色彩のことで、物質に縛られない色を指します。

通常、絵画で言う色は、物質的に定着したものを言い、ここで使用するクレヨン（オイルクレヨン＝オイルパステル）も物質の色であるため、自然界に浸透したこの“光の描く色”を、描き現すことはできません。

描いたものは、あくまでも物質的な色に過ぎません。

しかしこの物質の色が、人間の意識を介して、精神的な高みへと昇ってゆくことができる。と、言うことができます。

ここでいう精神性とは、自然であったり、芸術作品に触れて感動を覚えた経験をお持ちの方ならどなたでもご理解いただけると思うのですが、敢えて言わせていただくならば、

……人は、目にした物に、物質では到底表現できないような事象を発見したときに、

思いもしない感情が心の奥底から湧き上がって来る。のを禁じ得ません。

……つまり、心の震え（感動）を覚える。

そしてそのときの感動は、物自体によって引き起こされたのではなくて、その物の物質性を、なにものかが、精神的な高みへと引き上げたことによって惹き起こされたのだ。

——と気付くことができます。

すなわち、

自分の意識が——、精神的な働きかけをそこに見出したのだ。と、

そしてこの、自己の内的な働きかけが、“光の描く色”に触れたときに、見えないベールが取り払われて、物質界に縛られない、「色彩世界」が開かれてゆくのだ。——と考えます。

そこで“KOOSAIHO”は、この自然界の光の描き現す虹の色を、一色、一色、見分けて行くことから始めてゆきます。

なぜなら、自然界の描き現す色が……、絵の具のように混ざった状態で現れるのではなくて、一つ一つの色が、独立しながら、重なり合い、浸透する姿になって（いわゆる、和音のように）見えてくるからなのです。

それは、自然界のありのままの現れであり、混ざってしまう色とは（混色した状態から元の独立した色として取りだせなくなるのは）、絵の具の持つ特性である。と言うことができます。

そして――、この絵の具のもつ特性こそが、人の認識を、高みへと導いてくれるのです。

そこでKOOSAIHOは、自然界の“光の描き表す色”があらゆるところに重なり合った姿で現れるので、先ずは、そのひとつ一つの色を識別して、ひと色、一色と重ねてゆくことから始めて行きましょう。というわけです。

*

こうして、自然界の色彩に目を向けてゆくと、普段何気なく見ている風景の中に、実に多種多様なすがたの色の存在することが、観察されるようになります。

それは、通常、平面的に捉えている色にはない、「奥行き」や「運動」といった違う要素のことです。

（色を観察するとき、物の輪郭を見ないようにうんと目を細めると、色の状態が観やすくなります）

それは、遠近法的に表現される、奥行きでも、筆の捌きによる動きでもなくて、たとえば、一枚の葉っぱには、葉っぱの厚さをはるかにしのぐ色の深さが観察されますし、光の中に移ろい変化する、色彩の様子を観察することができます。

つまり、写真に映した生物と、実際の生物との違いのように、立体的かつ動的な姿として——です。（印象派の作品には、その表現の試行錯誤が窺えます）

また、太陽光線をつくる影の中には、美しくバランスのとれた虹の色が観察できるのに対して、人工の照明によって作られる影の中では、色と色の浸食とも思える、バ

ランスを欠いた姿が観察されます。

*

自然界の色彩をつぶさに観察していると、そこに実に多くの事象が現れ出して、まるでそこに……、秘密の出来事が打ち明けられているかのようです。

しかし——、その様子を留めようとした途端、それらの色は沈黙してしまい、何も語らなくなる。と、感じられるに違いありません。

それは、自然界の色彩が、シンプルに見えながらも実に複雑に関わりあい、しかも移ろいやすく、わたしたちの目も、意識も、その動きについてゆくことに、まったく慣れていないから。……という理由が挙げられます。

自然は、そのように不自由である人の意識に、

『もっと自由でありなさい。』——と、導いてくれているかのようです。

空を見上げてじっと観察をつづけていると、この自然界に見る色の深さとは、一つひとつの色の個性の織りなす深さであり、動きとは、それら色と色とが、互いに触れ合い、ぶつかり合うときに、高揚し、衰退し、生成し、壊れゆく、瞬間瞬間に繰り広げられてゆくドラマなのだ。——と、認識するとき、

やがて、肉眼で見る物質よりも、もっともつと緻密で繊細な粒子が見えるようになり……、

自然界は、このような出来事に満ち溢れていて、そこに触れたときに、わたしたちは、感動を覚えずにはいられなくなるのだ——！
との思いが——大空に舞う翼のように羽撃はばたきはじめるのを覚えるのであります。

このように、神秘に包まれた自然界の色彩に思いを馳せ、観察と描写を繰り返し試みながら、色彩の本質であるものに近づいてゆきたいと考えます。

〈自然界の色彩〉

自然界の色彩は、観察する者によって見え方が異なる。——という事実を、スケッチ会の現場を通して教えられます。

また、止まることなく活動する自然界の色彩は、まるで、移ろいやすい自分自身のようだ。——とも、感じられてきます。

しかし、だからといって、そのことで描くことが思いのままになるわけではありません。

逆に、慣れは、自分の思い込みに走ってしまい、画面の色をにっちもさっちも動けなくして濁らせてしまったり、

あるいは、それまで壁のように感じていたものが突然取り払われ、……たような気分になって、これまでの手法を一新して、自分の今いる地点が分からなくなっていく詰まる。

——といったことが度々起こって来ます。

そのため、絵を描きながら惹き寄せてしまうそれらの囚われを、一一吟味いちいちぎんみしながら排除する。注意力と判断力が、厳密に求められることになります。

自然界の色は、自分が青を欲すれば青が現れ、黄色を欲すれば黄色が現れ、赤を欲すれば赤が現れる。……といった具合に、自分の内面に依存するかたちで現れてきます。

そのため、描き手が、自分の考えでもって空は青以外の色であってはならない。とか、太陽は黄色以外の色であってはならない。とか、いやいや、太陽は赤でなければならぬ。

などと、決めつけてしまうと、人と人とのコミュニケーション自体を悪くして、自然の姿とは別ものの、人間関係の方に頭を悩ますことになります。

実際、こんな話を聞いたことがあります。

昔、ある方が、小学校の絵の授業の最中、空の中に黄色を発見して、空全体に黄色

を描いたのだそうです。

すると先生から、

空の色は青色である。——と、みんなの前で注意を受けてしまい、そのときから、絵を描くことに大変な苦手意識を持つようになってしまった。……とのことでした。

同じような経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないかと思います。

このようなことは、前述した自然界の色彩の本来の在り方からすれば、由々しき問題になる。のでありますが……、しかし、もしもそのとき、その方の観察が空だけに止まらずに風景全体にまで及んでいたら、
そして——、

『黄色は！、赤は！、いやいや、青や、紫や、ピンクもオレンジも、もっともったくさんの色たちが……、空に、海に、山に、そして野の草花や、虫や、鳥や、月や、星々の中でも輝いている！』

ことが、発見されていたら、苦手意識は、密やかな楽しみに変わっていたかもしれないま

せん。

空に浮かんだ雲のことで言えば、日中の、白くはつきりした雲や、霞がかったグレイの雲の中であつたり。と、様々ではあるのですが、普段見慣れた白や灰色がかつた雲の中に身を潜める……、黄色や、紫や、ピンクや、オレンジといった色たちが、ところにより鮮やかに、ところにより緩やかに輝いている様子を観察することができます。（先述したように、うんと目を細めて観察してみてください）

その現れ方は実に捉えようがなく、時間帯や季節、大気の状態にもよりますが、観察しているその人の、そのときのころもちによっても変化する。……としか言いようがないほど、まるで、生き物のように変化するそれらの色たちを観察することができます。

*

日の出前……、夜の帳とばりが白みはじめて一日の幕が開かれてゆきます。

明るさは、次第に黄色味を帯びながら、徐々に夜の帳の中へと浸入し、同時に、退潮する暗がりの中から……鮮やかな青が姿を現します。

明るさは、空全体を包み込むように広がりながら、一日の、その清らかなはじまりが、喜びに溢れるエネルギーに充たされてゆく……、と感じることができます。

みるみる高まりゆく明るさは、やがて昇りくるものを讃えるように……、水平線辺りを赤みがかった色に染め上げながら、

すると……、やって来る者に道を譲るかのように、

あるいは、生まれくる者を息を潜めて待つかのように、

——突然静まる。

と、静寂を割り、大空を揺るがす轟きとともに、

色彩の根源である放射する光が、厳かに……、その姿を現しはじめる——

このときの風景と、夕暮れどきの風景を写真に撮って見比べても、大した違いは感じられないかもしれません。

しかしこの両方を、じっくり観察しながら絵を描くとき、その違いは歴然となります。

朝陽の風景を描くと元気を貰う。
「もう一枚描きたい」という気分になれる。

しかし、夕陽の風景を描いた後は、
まるで……泥の中に身を沈めるような倦怠感けんたいかんに襲われます。

そしてそのときに、朝を染め上げてゆく黄色と、夕暮れを染めてゆく紫色を、視る
(体験する) ことになります。

しかしこの色は、普段わたしたちが見ている色や、写真で捉えることのできる色とは性質が異なります。

“生命感覚”で視ている。とても言うような感覚で、

朝の、清々^{すがすが}しい気分。

夕の、もの哀しげな気分。

……のように、内的に感じられる色なのです。

つまり、朝の色、夕の色という、

“時”に応じた、“基調となる色”のあることを体験します。

これを仮に、「時の色」と呼ぶことにします。

この「時の色」の一日の変化に注目すると、

オレンジ色に染められてゆく朝焼けの色は、背後に“黄色”という基調の色を持ち、その明るさによって、朝が導かれてゆくのが感じられます。

やがて明るさは、徐々に強さを増しながら、その基調を活動する“オレンジ色”に変えて、日中の一番陽の高くなる頃には、焼けるような輝き（明るさ）の中に、“赤”本来のすがたである“最大の生成と最大の破壊”を持つエネルギーを感じることができます。

こうして、一日の移り変わりの中で最高潮に達した「時の色」は、

その強い陽射しの中に徐々に影の色を交えながら、

黄昏時には、慈しみあふれる哀慕の色……“赤紫色”に染まりながら、

日没の頃には、西の空を染め上げてゆく、哀しみにも似た茜色あかねいろの中に、基調となる……懐深い“紫”の浸透を感じることができます。

こうして、陽の光が退潮してゆくなか、やがてどこまでも深い“群青”に導かれるように、「時の色」は、夜の帳の中に“青く”深く沈み、夜特有の活動に入ってゆきます。

やがて、闇の深さが満ちて夜の活動も終わりに近づくころ、
ほど解けゆく闇のなから“緑”がすがたを現し、

「時の色」は、新たな朝に迎えられてゆきます——

このように、それぞれの基調の色が、それぞれの気分、つまり人間の感情と深く関わり合っていることを、自然界の色彩を観察しながら、意義深く体験することが出来ます。

（しかも、その時々「時の色」の中にも虹色の変化があつて、更にその中にも……と、幾重にも重なり合う虹の連鎖として感じられてきます）

*

さて、自然の光の色を観察しながらのスケッチが進むにつれ、徐々に、大気に満ちた虹の色が観察されるようになり、更には、影の中で輝く色も観察されるようになります。

自然界の色彩は、明るい場所であつても暗い影の中であつても、緻密で透明な輝きに満ちています。

そして、そのときの色は、先述したように、肉眼の奥にある“生命感覚”で捉えているような感じ方で、肉眼で見えるよりもはるかに実感（リアリティー）を伴います。つまり、自分の外側の現象ではなくて、自分の内側からやって来るかのように……。

このように書くと、何か、訝^{いぶか}しげな話ではないのか？ と、思われるかもしれません。

しかしスケッチの現場に来て、物の形を追う意識を離れ、（見ている意識……そのものに焦点を向けることで、）概ね、そのうちの何色かは直ちに観察できる。ことを、スケッチ会の現場で確認しています。

特に、先にも例を挙げた、小学校低学年からその歳に満たない年頃には、既成概念で固まった大人の意識とは違い、はるかに柔軟な感性でそれらの色を観察することができる。……ことも確認しています。

例えば、ある観光名所を歩いていたとします。

そこに突然、眼前に広がる光景が現れて——、一瞬、息を呑む瞬間のあったことを思い起こしていただきたいのですが、（観光名所に限らず散歩の途中であったり）

その瞬間、囚われのない自然の色彩が、肉眼を通り越して心の奥にまで届いていた……ことが考えられるのですが、

しかし、この“光に溢れる色彩”は、先にも触れたように、留めておくことができません。

掴もうとした瞬間にはすでに取り逃がしてしまい、もぬけの殻となった場所に、どこからか持って来た、あるいは、自分の中に作り上げたイメージでもって埋め合わせる。ことになり、感動はたちまち別ものに変化しています。

もしもそのとき……、

『緑の色は、黄色と青によって作られる』という概念でもって絵を描きだしたとしたら、

自然界にある“光のすがた”が、絵の具によってどのように変化してゆくのが解らなくなり、

……つまり、自然界にある光のすがたを人間の頭でもって“概念化”しようとした途

端、絵の具にある“ひかり”となる要素が見失われてしまい、その事実も、見逃されてしまう。……ことになる、ということが。

これは勿論、ここで述べている内容を含みます。

だからこそ――、

“概念化”してゆくことで失われてしまう“ひかり”^ニを、
再び取り戻す試みが必要である。と――、強く思うのです。

人は、大人になりながら、出来事を概念化する方法を身につけてゆきます。

なぜなら、現実社会がそうであるし、

それが、現実社会を形成してゆく上で、必要なことである。……と、学ぶからであります。

*「このとき“光”は、内的な意味になるので“ひかり”とした。

しかし……、そのことによって、失われてゆくもののあることも識ることになる。

これは、大人になって学ぶ、人間にとっての「必要」であり、取りも直さず、自らが、人生を通して負うことになる課題。

——なのではあるまいか。

つまり——、

人は、光（＝ひかり）の要素を失う。という、観念的にのみ関わっていたら気づくことのなかった問題に、“生命感覚”をもって関わる。……ことで、

描くという行為はどこまでも内面化されて——、
“生きる”という問題を、表出するに至る。

このとき、

『光であるものから“ひかり”を失う——とは、一体、どういうことなのだ？』

という問いが発せられ、

問いは、自分自身の内側に向かって突き進む、自問自答する“牙^や刃^{いは}”となる。

しかし一方、このような内的な問いを生じさせることなく、観念的に、あるいは無感覚的に（非生命的に）この問いの前を通り過ぎるとき、問いの吟味は為されないまま、絵の具は、素材のまま画面の上に乗せられてゆく。——ことになる。

このときの絵と、幼児の描く絵を混同することは見方の誤りとなる。ので、その点に触れたいと思う。

幼児を含む子供の思考は、脳を経由して営まれる大人の思考とは異なり、はるかに直に素材に触れている。——ことが考えられるのであり、

子供の思考は、そこに、素材の持つ内的な“ひかり”を見るからこそ、

幼い時期に見た記憶が心の核に留まったまま、大人になってもなお、消えることなく遣り続ける——のであらう、と。

子供の絵が天才であると言われる所以は、

感じたものを、感じたままに現している。……ところに見出されるのであり、それは、子供にとっての自然であり、生きるための「必要」なのだ。

すると……子供に、大人の喜ぶような絵を描かせようとすることは、この天才を阻害し、創造の芽を摘んでしまう。ことになりはしないか。

子供が、喜んで描くものを理解することで、はじめて、創造の芽が育まれ、成長し、発展する姿を、見届けることになるのではないか——、と。

思考という、脳の活性化でもって世界を見てゆく大人になってはじめて、

「光であったものから失われゆく『ひかり』とは……、一体何であるのだ？」という問いが発せられ、

そこに、『生きる』という問題が生じ、——辛苦が生まれる。

（このときの辛苦は、飢餓やいじめといった外的要因のもたらす辛苦とは別の、もち

ろんそのことも含むが、どのような状況の中にあっても生起する、自己の内側からやってくる、内的要因（内省）のもたらす辛苦。を指す）

——ことを考えるとき、

人間の生命そのものが、

つまり——“生きる”ことが、

“ひかり”を求める。——のではないか。

その道標となるものを、

宗教が……、人の中に、

芸術が……、素材の中に、

哲学が……、思想の中に、

政治が……、社会の中に、

見出してゆくのではないか？

——が、しかし、

この問いを見失うとき、

“生きる”という問題は、外的要因に渡され、
自分の外側に問題を抱えるような格好になる。

そして——、その外的要因化した問題が、纏まととなり、本人に基づかない様々な幻影
に姿を変えて、本人自らの姿を変身させる。

——ことになる。

それが進むと、外的要因化された“生きる”という問題が、人間に対して悪戯わるさをす
る存在にすがたを変える。

それが……、だましやいじめ、事件、事故、飢餓、紛争などなどの社会的問題に結
びついてゆくことになる。——のではないか。

（しかしこの先は、色彩論から逸脱しそうなので、ここで止めます）

他方、内的要因のまま残された“生きる”という問題は、そこに問題を抱えるから、
内的な牙で噛み砕かれることで、問題の核心にある“答え”を、解き明かす可能性が

残されることになる。

この――、内的に進められてゆく作業の過程で、大人になりながら既成概念化されて見えなくなってしまった、幼児の頃に見ていた光に溢れる世界観が……、

輝きを取り戻しながら、現実世界を照らし得る光へと、甦りを果たすことになる。

……に違いないのだ。

そして、“生きる”、その人の努力の成果として、辛苦という“影”の中に潜む“ひかり”が、その人自身のものになって輝きはじめる。のに違いない。――のだ。

つまり、光である自然界の色彩を、光を持たない絵の具という素材で描き現そうとする試みは……、

外的要因でない“自分”の中に、

“ひかり”となる要素を見つけだそうと試みる、

どこまでも意識的な作業なのだ。

そして、この意識的な作業を通して克服されてゆく過程が、目には見えないが、素材を通して明かされるからこそ、

人は、そこに、感動を覚える。——ことになるのではないか。

自然界の光は、人間によって一旦その外的“光”を失う。

……しかし、人の内的な営みを通して、再び内的な“ひかり”へと変換され得る。

という事実を、自然界の色彩は教えてくれる。
いや、そこへと導いてくれる。

*

もしも絵の具が、下にある色を損ねることなく重なり合うことができたとしたら、見た目には、自然に近い輝きを描き現せるのかもしれない。

それは、テレビや、PCや、スマホのモニターのように、電気的光線を利用した重なりとなって――。

しかしそのように便利な絵の具ができたとしたら、

先にも述べた、表現の内容となる意識的な作業が失われ、

人は、絵の具という素材を通して意識を高めてゆく“道”を、

見失うことになりはしまいか……と、以前より危惧していたが、近年のテクノロジー

ーのもたらず限りなく視覚的な映像は、

網膜に受ける刺激を直接的に脳に伝達して、人間の内的な作業を阻害し、得られる収穫物を奪っているようにしか見えない。

……のは、わたしの眼の誤りだろうか。

網膜に受ける、外的要因の作りだす刺激は、人間の内的なパワーを消費させるだけで、増やすことをしてくれない。

人は、外的要因の作りだす強烈な刺激に曝されると、自分の中に創り上げる内的イメージを見失うことになる。

つまりそれが、“生きる”というイメージ――

“生きる”というどこまでも内的な問題が、外的要因に隠れて見えなくなる。

イメージとは、何かの大容量の情報を得たときに働くのではない。

限られた素材を、他の素材と組み合わせたり、合体させたり、反発させたり……と、その素材のもつ情報を弄り回しているときに湧き出す内的なパワーだ。

では、“感動”とは、内的な“ひかり”とは、“生きるイメージ”とは、一体……どこからやって来るのか？

自然界の色彩に目を向けるとき、そこには前述したように、内的な輝きを持つ色彩があつて、つぶさに観察することができます。

その姿は実に美しく、バランスを保ち、その美しさやバランスが……見る人の心の中に「喜び」という明るさを与えてくれます。

それは、自分という者を、内側から温めてくれる。——と感じられます。
(もちろん、その人の感じる程度に応じて)。

つまり人は、自分の内側から湧き上がる喜びに明るさを感じるものであり、それは、外的な光の持つ明るさよりもはるかに親しい(近しい)ものです。

現代において……人は、過去のような偉大なる明るさよりも、もっと身近な、より親密な明るさに……「ひかり」を求めるのではないのだろうか。

自然という存在が、人間の内的な活動で汲み取れる喜びを無限大に持つ存在であるからこそ、……人はその事象に“生きるよろこび”を発見することができるのであり、“光”ひかり”である認識を得ることができる。のではないのでしょうか――

その自然界の“光”に応えるかたちで、
自らの内面から“喜び”ひかり”が立ち上がり――、感動に結びつく。
のではないのでしょうか。

そして、

この自己の中からやってくる“ひかり”の明るさによって……、
人間である、『生きる』理解が進められて行くのではないのでしょうか。

こうして、闇の中から立ち現れる、
“自分”という“ひかり”によって、

日々の、日常に生起する闇（不安）の正体が解き明かされ――、
日常の中の闇いは、それまでとは違う、“内的ひかり”を強化する機会と捉えて、

“生きる”積極的な意志に置き換えてゆける。……のではないかと考えます。

——だがしかし、

その成果（実り）を、あまりに性急に求めると、

認識の際おこなわれる自問自答の牙が——諸刃^{もろは}となり、

自分自身を……、

そして相手を……、

深く傷つけてしまうことにもなります。

このような意識的な作業を、日常の多忙さの中に直ちに持ち込むことは、

嵐の只中に、裸の身を曝^{さら}すようなこととなり、無謀な結果に繋がりがありません。

従って、まずは、日常から離れた意識の集中でできる場所……、

これはゲームやPCなどの外的刺激ではなく、たとえば……自然、あるいは美術、音楽、映画や演芸・演劇や読書、スポーツ等々、

（そのことを通して内省に赴ける事柄に集中して）、

そこでの探求を進めながら、内的に獲得される認識を……徐々に、忍耐と共に、日常の中へと持ち込み、拡げてゆくことができれば、

なによりそれが、現実の成果に結びつく、良い方法になるのではないかと考えます。
(わたし自身、出来てはいないのですが……)

“KOOSAIHO”は、スケッチという非日常の現場に身を置き、

日常の雑多な出来事から一旦意識を切り離して、囚われのない目で、
自然の色彩を観察し、

自然のもつ美しさとエネルギーに触れながら……英気を養い、
本来の自分に立ち返ること……、

日常の雑多な出来事の絡み合いの中にも、必ず、解ける糸口のあることを、自ずと
理解できるようにする。——と、考えます。

〈虹の贈り物〉

自然の色彩の観察を進めてゆくと、自然界の色彩は、全体性の中に個性を現している。――と、気づかされます。

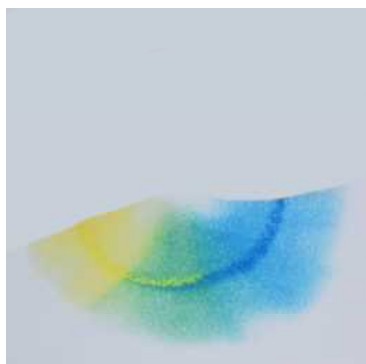
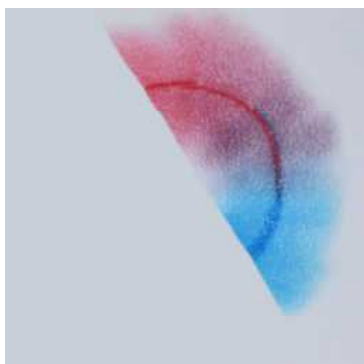
虹の色は、絵の具（ここではオイルパステル）を用いると、黄色・青色・赤色の三つの色を重ね合わせて擦ることで現すことができます。（左図参照）



このとき例えば上の図と、下の図の黄色を隠したときを比較して、



つぎに、上の図と、下の図の赤を隠したときを比較して、



さらに、上の図と、下の図の青を隠したときと比較して、



……と観てゆくと、三つの色が揃った上の図と、三つの色の一つを隠した下の図とでは、色の状態が違って見えてきませんか？

もっと適切に言うなら、三つの色の一つを隠すと、色固有の輝きが損なわれる。……ことに、気付かれないでしょうか。

(※ここで取り上げる色は、絵の具の色のことです)

実はこの図、ドイツの詩人ゲーテが考えた『色相環』という色の配置図を、自分流にアレンジした「虹の太陽」の図、なのですが、

ゲーテは、プリズムを使った実験を通して、自然界の色彩の調和する姿を『色相環』という図にして示しました。

この『色相環』にまだ出会う前……、

主催させていただいていた子供スケッチ会に、お兄ちゃんだったかお姉ちゃんにくっついて来ていた小さなお子さんが真似て描いていた絵が……、まさに、このようだったのです。

そのころわたしは、『虹彩法』^{こうさいほう}の説明を、虹の形を模しておこなっていたのですが、その絵を見た瞬間、

『あー、これぞ、求めていた自然の色彩だ！』と、感じました。

その後、ゲーテの『色相環』を知ることになり、それが『虹の太陽』へと進んで、現在のわたしのイメージや色やことばの橋渡しになっています。

この三つの色の性質の違いは、探求するほどに明らかになります。（この辺の説明は、わたしの拙著、〃スケッチに行こう〃で述べています）

この虹の環^わに、緑から紫に至る対角線を引いて右下の部分を隠したとします。すると、黄色からオレンジ色を経て赤に至る明るい色が現れます。（上の図）



それとは逆に、左上の部分を隠すと、紫色から青を経て緑に至る暗い色が現れるの

がお分かりいただけたと思います。（下の図）

そしてこの図に、先述した「時の色」の黄色からはじまる一日の色の移り変わり、
更には、四季の変化を樹木に例えてなぞらえてみれば――、

一日の目覚めとともににはじまる「時の色」の“黄”は……、
新芽の芽吹きだす、輝く春の色に、

やがて木々の若葉は、夏の強い陽射し“赤”を吸収しながら、葉の色を深め、

秋……、懐深い“紫”の浸透の中に実を結び、

星々の煌めく宇宙の深さ“群青”に導かれるように、

“青”い冬の眠りへと向かい、

新たな、若葉の芽生えを待つ。

このときの、春に芽吹く木々の若葉の色は……、
光の表現である黄色と、水の表現である青との共働の成果であり、

夏の太陽に焼かれる若葉は、

その中に熱の表現である赤を吸収しながら活動をいよいよ高めて、

秋、豊かな実りに成して、

冬、種を遺して、葉は、土の表現となって還ってゆく――。

それはまるで、人生の巡りのようにも見えてきます。

こうして、色相環から広がるイメージを拡大解釈してゆくならば、
虹のすがたは、太陽の内的な顕れを暗示しているのではないか？、と見ても、差し
支えはないのではないか、……との勝手な思いから、“虹の太陽”になりました。

そして――、

このことを絵の具の表現に置き換えてみれば、

黄色は、青と交じり、自分の個性を失いながら緑という新たな姿を得る。

……これは、青もしかり。

赤は、青と交じり、赤という個性を損ないながら、紫という豊かさを得る。

……これは、青もまたしかり。

そして、赤と黄色は、互いの個性は損ねるが、オレンジ色という活発的な性質を得る。

つまり虹の色の関係は、互いの個性を打ち消し合いながら新たな姿を得る。……と、見ることができる。

しかし、これは逆に、

相手の個性を奪って、豊かさを得た。……と見ることもできる。

……しかし、これをそのまま人間社会に当て嵌めると、紛争になる。

そうではない。

——これはちょうど、人が、新たな認識を得たときにそれまでの認識を棄てる。ことに似ている。

つまり——、

個性を失った。のではない。

相互の関係性が、新たな個性を生み出したのだ！

失うことでも、奪うことでもない。創造なのだ——！

そして——、

先述したように、黄色という色は、赤色という色は、青色という色は、単独で成り立つことができない。

他の二つの色との関係性においてはじめて、固有の色としての自立性を持つ。

——ことを考えれば、

虹のすがたとは、違う個性の響き合いであり、

それは――、

個（人Ⅱ人間）から全体性（自然Ⅱ宇宙）へと到る、道標ではないのか。

“感動”は、そこからやってくる。――のではないか！

このように、

人は、絵の具という素材（物質）を通して、高い認識に進んで行ける。と、考えます。

更に――、

赤紫（明るい色と暗い色の中間点に現れる）という色は、

他の七色（日本で虹の色と呼ばれている色）がつくる構成体を、一つの全体性へと纏めるような性質を有する。

（※このことも、拙著、〃スケッチに行こう〃に叙述）

この赤紫（パープル）が――、

赤・青・黄色の交わりあう虹の関係性から現れ出るとき……、

虹の構成体は、更なる高み（深さ）へと導かれてゆきます。

自然の力が――、

この構成体を保持することを、行うのではないか!!

※ここに示した内容は、あくまで、わたしの内的要因に基づく話しであります。

ところで……、虹の色は、自然界の“光”と“闇”の間に展開しますが、物質素材を用いる絵画において、“光”と“闇”を、どのように取り扱えば良いのか？ という問題について。

「KOOSAIHO」は、先ず、画用紙の色を……光の色と考えます。（ちなみに、光は、物質的な明るさではないため、絵の具の白で現すことはできません。唯一、絵の具の中のどの色よりも明るい、画用紙の色を光の色と見做します。）

この画用紙の色を、虹の色を生じさせる一方の極と考えるとき、虹の色は、画用紙の色を起点に闇に向かって展開する。と言うことができます。そして、これは同時に、虹の色は、最も暗い場所から出発して、明るい画用紙に向かって虹の色を展開させる。

……とも。

「KOOSAIHO」は、この、最も暗い色を、人間の側に見出します。

そのため、わたしの主催させていただくスケッチ会では、なるだけ黒は使わないように、進めさせていただいております。

（実際、画面中に黒を用いると、深い色の観察が困難になります）

*

自然界の色彩は美しい調和に貫かれていて、

人は、自己の「思考」と「感情」という内的な力を用いて、

調和の世界に意識的に関わりながら、

その内で得た色彩体験（実り）を携えて、

ふたたび何度でも、

現実世界へと踏み出して、

“生きる” 内的な闘いに臨みながら、

“自己のひかり”を、強化して行けるのだ！

——と、確信しています。

日常こそは、自己の偏見や囚われの渦巻く内的世界の表れであり、僅かずつしか進んでゆけない“試練の場”であります。

そして……、色彩体験を通して会得される、

『自然界に輝く色彩は、外なる自然ばかりを照らすのではない。

それは——、自己へと差し延べられた“光”なのだ!!』

という認識が、

日常を取り巻く闇（不安）の存在を、確実に照らし得る“ひかり”に成る。

——と、固く信じております。

青空にある“青”の秘密は、緑の葉っぱにある“緑”の秘密は、

その色彩の内にも記されており、

人は、自己の内的な営みを通して、

認識する力を高めながら、
神秘の扉の向こうにある “ひかり” を証しつつ、
自己の内面を強化して、
全体に関わる者へと、成長してゆけるのだ、——と。

※拙著 “スケッチに行こう” では、ここに述べた内容を、実際のスケッチの観点から述べています。

二〇〇五年三月初版／二〇一一年二版／二〇二二年三版／二〇二三年六月四版／十月五版／二〇二四年六版

二〇二六年八月二十三日 第七版 瀬崎 正人